

谷川寺 薬師如来立像をめぐる一考察

宮田太樹（福岡市美術館）

谷川寺は福岡県八女市、矢部川南岸の小高い丘陵上に所在する。同寺に伝来する薬師如来立像（以下、本像とする）は、構造や造形的特色からその制作が平安時代前期まで遡ると推定されている、北部九州でも屈指の古像である。加えて、平安前期一木彫像の代表作として名高い京都・神護寺の薬師如来立像（以下、神護寺像とする）と像様が著しく類似すること、かねてより注目されてきた。本発表では、本像の制作背景を考察し、天長年間（824－834）に観世音寺講師恵運によって主導された写経事業が、造像の直接の契機となった可能性を指摘する。

まず、本像の造形的特色を、畿内および九州の作例との比較から検討し、1）その制作は9世紀まで遡りうること、2）神護寺像を直接に参照したわけではなく画像情報が介在した可能性が高いこと、3）北部九州の在地様式とも呼ぶべき表現が採用されていること、の3点を指摘する。

在地様式が採用されることから、本像が制作されたのは谷川寺周辺であった可能性が極めて高い。一方、本像の顔立ちは、神護寺・五大虚空蔵菩薩像をはじめとする9世紀第2四半期に畿内で制作された諸作例に非常に良く通じており、これは本像のもとになった画像情報が畿内、さらに言えば神護寺周辺で制作された可能性を示唆している。このように考えたとき、次いで問題となるのは、谷川寺において、いかに神護寺像の画像情報を入手することができたのかということになる。

これを考えるうえで、大きな手がかりとなるのが、観世音寺の統領であった観世音寺講師の存在である。同職は、平安時代前期において大宰府管内諸国の寺院を統括する権限を有していたが、東大寺戒壇院の戒師より選任すべきことが定められることから、その出自が中央にあることが判明する。したがって、本像のような中央風と在地風とが共存する造形が谷川寺で実現するためには、この観世音寺講師が大きな役割を果たしたと考えられる。

そこで、発表者が特に注目したいのが、天長10年（833）より、観世音寺講師として一切経写経事業に関わった恵運である。この写経は、神護景雲年間（767－770）に起こった皇位継承を巡る事件（いわゆる、宇佐八幡宮神託事件）に際して下された八幡神の託宣に基づくもので、大宰府が朝廷の命をうけて作成された写経は神護寺へとおさめられた。神護寺像も、この八幡神の託宣に基づく造像であることに鑑みれば、写経事業を契機に神護寺像の画像情報が恵運を介して観世音寺へともたらされ、本像の造立がなされたと考えることができるだろう。

以上の考察を通じて、観世音寺講師によって進められた北部九州の造像活動の一端を明らかにするとともに、それが、朝廷周辺といかなる関わりをもって展開したのかについても展望を述べたい。